

節孝還魂

“*Zit Haaü Waan Wan*”: A translation to modern Japanese

田 中 景

Abstract

This is a translation of “*Zit Haaü Waan Wan* (Chaste and dutiful wife revives from death),” *muk-yu shu* or a vernacular literature of fixed-form poetry written and published in late 19th century Guangzhou of Canton province. Stories of *muk-yu shu* had been cheaply sold and widely read among people in contemporary Canton region as a popular entertainment. Moreover, the *muk-yu shu* reading served as an opportunity for inculcating the Confucian ethics of gender moral code to its major audience, particularly to women, who generally had no access to education regardless of class differences. Thus “*Zit Haaü Waan Wan*” also let the readers and listeners be aware of chastity and filial piety taught in the story of a woman waiting for her husband’s returning, who left for California as migrant labor, while taking care of her mother in law.

解題

本稿は、湯尹材の執筆による木魚書「節孝還魂」(1892年・1896年)¹⁾の現代広東語訳を現代日本語に翻訳したものである²⁾。本作品は、中国広東省新會県の農村を舞台に、落ちぶれた実家を建て直すためにアメリカのカリフォルニア州へ金鉱採掘の出稼ぎに出かける夫と、貧しさに耐え姑を支えながら夫の帰りを待ち続ける妻の孝徳と貞節を、著者の知り合いからの聞書という形で著された物語である。作品は、広東の移民送出地域とアメリカの中国人コミュニティの双方の住民の間で読まれたとされている³⁾。

木魚書とは古くから広東地方一帯に普及した大衆文芸であり、もともとは中国の古典や伝説、広東地方の風習や詩歌を、当地の方言である広東語で「木魚」と呼ばれる定型詩に著したものである。19世紀中期になると、男女の結婚を題材に儒教倫理に基づいたジェンダー

節孝還魂

規範や夫婦の責任を説く作品が主流となり、さらに20世紀に入る頃には、本作品のように同時代の世相を描きながら道徳律を説く創作作品も登場するようになった。

このように木魚書は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて様々な題材を包括しながら、祭や節句の折に集落を訪れる盲目の旅芸人による謡い、あるいは識字能力のある男性住民による読み聞かせによって、特に女性住民をオーディエンスとして大衆に普及した。すなわち木魚の物語は、娘、嫁、母としての役割に徹して生きる日々の中で当時の女性に得られた数少ない娯楽の機会であった。それと同時に、社会階層に関わらず就学の機会がなかった女性にとって、物語を聞くことは中国の古典や伝説、広東地方の風習や文化、そして儒教的な道徳律を学ぶことのできる教育の機会でもあった⁴⁾。

「節孝還魂」の物語の舞台である広東省新會県は、近隣の新寧県（1914年以降は台山県）、開平県、恩平県とともに四邑地域と称される。この地域一帯は、1848年のカリフォルニア州のゴールドラッシュ以降、渡米移民を多く送出した地域として知られる。作品が出版された19世紀末は、彼ら移民男性は主に鉱山採掘や鉄道建設、農業労働の低廉労働者としてアメリカ西部州の基幹産業に参入し、渡米後、数年から数十年が経過していた頃であった。彼ら移民労働者の当初の渡米の目標は、アメリカで賃金を貯めては郷里の家族に送金して家計を支え、最終的には蓄えを手に帰郷し、家族とともに経済的に不自由な生活を送ることであった。

しかし実際には、渡米に際し前借りしていた渡航費や入国書類作成代行料の返済、また地元の白人労働者による様々な業種からの締め出しや暴行、さらには地方および中央政府による中国系住民を対象とした差別的な法律の制定も重なり、大半の移民にとって送金や貯蓄はままならないものであった。結果として19世紀後半、新會県を含む四邑地域では、移民の妻が数年から数十年、あるいは一生もの間、家を出たきり送金も便りもない夫の帰りを待ち続けるという現象が頻繁に生じることとなった⁵⁾。

よって「節孝還魂」は、物語を通して四邑地域における渡米移民送出という新たな社会風潮と、それによってそれまでは盤石であった儒教倫理を中核とする家族制度が崩壊していく様を提示し、併せて家族制度を維持、あるいは回復するために必要なジェンダー規範—すなわち孝徳と貞節—を、移民の郷里とアメリカの華人コミュニティで作品を鑑賞する人々に再び思い起こさせるという狙いがあったと考察される。木魚書の目的が教訓と道義を示すことであるならば、「節孝還魂」もまた19世紀末の四邑地域、およびアメリカの中国人コミュニティにおける住民に向けて、家族制度が危機に直面していることに気づかせ、教訓と道義を語り聞かせるものであったと言えよう。

そして、「節孝還魂」の語りは従来の木魚書の主要な消費者である女性のみならず、むしろそれ以上に男性に対して向けられていたことが伺われる。本作品の導入部では春秋時代から明代までの著名な儒者を引用しながら孝徳の大切さが説かれ、結びの部分では男性として

徳ある人生を送るための心得が切々と述べられている。また一般に木魚書の作家を生業としたのは、科挙に落第、あるいは及第したが任官されなかった儒者であり、木魚書が方言によって著された大衆小説であることから、作家はそのことを恥じて作品に作者名を記載しなかった。ところが「節孝還魂」の作者は名前を明らかにし、作品がいわゆる「正統な文章」ではないことを末尾でことわっている。このことから、もともと作者は木魚書の作家ではなく官職に就いていた儒者であり、本作品を識字能力のある男性読者に広く普及させる目的で、木魚書の体裁をもって執筆したと推測できないだろうか。

本作品の主人公が没落した良家の男性であることから、作者が作品を届ける対象として女性以上に見込んでいたのは、一通りの教育を受けながらも官職に就けなかった地方の名家や当時の広東省の社会変革の中で出現した新興のプチブルジョア階層出身の男性で、海外移民に活路や投機的なチャンスを見出さざるを得なかった人々を含む多様な社会的出自の男性であったのではないだろうか。すなわち観方を変えれば、従来の在米華人移民史研究において一括りに労働者階層の出自と位置付けられてきた四邑出身の移民男性の中には、実際にはいわゆる中・上流層の者も少なからずいた、と考えられないだろうか。結論として、本作品は海外移民の機会を求める四邑地方の男性、および郷里を離れて幾年となってしまった渡米移民に向けての訓戒となったのではないだろうか。

無論、「節孝還魂」の女性オーディエンスへの教えもまた看過してはならない。本作品は伝統的な道徳律に留まらず、当時の中国の新しい女性像を反映しているとも考察されるからである。物語に登場する主人公の妻・李氏は、優秀な儒者を父に持つ名門の出で、儒教道徳規範を身につけた、読み書きの出来る女性である。すなわち、旧来女性は無学であることを良しとし、特に良家の女子は纏足をし、私室の外に出ないことが理想とされていた中で、李氏という知性のある女性が新たな理想として提示されているのである。そして李氏は、自身の持つ才能—識字（学識）、紡績、家政—を全て家族制度の維持のために役立てる活動的な女性として描かれている。この点に、梁啓超らによって新たに提唱された女権論と女子教育普及の萌芽という同時代の世相が本作品から読み取れることを指摘しておきたい⁶⁾。

翻訳

「節孝還魂」

もし父母が家族でないとしたら、家族とは誰のことであろうか。父母に孝徳を尽くさないとしたら、一体誰に尽くすのであろうか。父母が達者な間、面倒を見るのに十六両⁷⁾を費やし、そのお返しに将来子や孫たちがあなたに一斤を費やす。仮に千両の黄金と万両の銀を使い果たしても、金銭で父母の命を買い戻すことは容易ではない。もし父母をこの世に生きている間に敬わなかったとしたら、父母が亡くなった後にあの世へ鬼神を拜みに行くのに一

体何をしたらよいのであろうか。父母が百年の寿命を享受することは難しい。もし父母が存命の間に孝順を尽くさなかったなら、死んでから彼らを思って嘆き悲しんでも無意味である。もしあなたが父母の言いつけを守らないまま彼らがこの世を去ったなら、彼らと再び会うのはただ夢の中だけである。曾子⁸⁾は『喪礼』を読むときはいつも涙で衣の前重ねを濡らした。亡くしたら取り戻すことができないのが家族、息子や娘が親に恩返しをしたいと願う時には親はすでにこの世にはいないもの。だから牛一頭を屠って父母の墓前に供えるよりも、父母がこの世に生きているうちに鶏肉や豚肉で養う方が良いのだ。

真西氏はこう話している。昔の人は父母に尽くし、一日たりとも親の側を離れることを良しとしなかった。よって、たとえ両親が衣服を着て暖かくしていたとしても、彼らの体の調子を観察し、彼らのために食事を供するなど、すべて直々に世話をした。しかし中には政治の世界に進み、国家天下のことに携わらなければならない人もあり、従って『陟岵』⁹⁾や『鶉羽』¹⁰⁾といった詩歌は哀愁と悲嘆で満ち溢れている。また、中には天に向かって文句を言う人もいる。後世の役人はたとえ政務に没頭していようが、仕官せずに他郷にいようが、「成功して後に帰郷すれば、父母は名誉に思う」とは言おうとしない。

「親に仕える日には限りがあり、財産が巡って来ても我々は掴むことができない。」この句を語る時遊子¹¹⁾の心はいつも悲しみで一杯になり、故郷を離れた人は感傷の涙を流す。特に家に残された人は、一層努力して父母に仕えなければならない。洪浩は熙寧年間¹²⁾に太学¹³⁾で学び、十年間家に帰らなかった。父親は浩に次のような詩を書いて送った：「いかに太学で勉強していようとも一度くらい帰郷しても悪くなかろう、お前が父母のもとを離れてすでに十余年、帰郷の道のりがあまりに遠すぎるなどの言い訳をするな、お前も父母がすでに七十歳になったことを気にしているはず。私の腰の下には蘇子印がなくとも、篋笥の中には古萊子の道化服がある。春頃には帰ってくると約束しておくれ、そうすれば私たちと再会できるだろう。」¹⁴⁾ 洪浩はこの詩を受け取るとすぐに帰郷し、父母に仕えた。

呂仲實¹⁵⁾は妻に次のような内容の詩を書き送っている：「私は家を離れてからずっとお前のことが気がかりなのだ、一人で貧しい家庭を切り盛りし、また家に柴や米があるかどうか心配し、その上、上の息子と下の娘の世話をしなければならぬのだ。私たち夫婦の間に通う情はとても深く篤く、君臣の義にも一致する。私がいずれ無事に帰郷する日を迎えたら、一緒に酒を酌み交わしながら離れ離れだった頃の想いを分かち合おうではないか。」

私の友人で役人の何君は、かつてアメリカに渡ったある人の名言を一つ語ってくれた。「私たちは罪を犯したがために何万里も遠くに流されたのでも兵士にされたのでもない、しかし夫ある婦人を十八年もの間生ける寡婦にしまっているのだ。」さらに、「父母に孝行し、妻子を養いながら、家の生計を維持することは容易ではないはずだ、ほんのしばしの間でもそつなくこなせる者がいようか。番攤¹⁶⁾、女郎買い、そうしたことは海外では常態であるのは言うまでもないが、一旦悪習に染まってしまうとたやすく元には戻れない。忠誠心

を守り、正直で、誠実に働き、己に厳しく修養を積んだとしても、野蛮ですさんだ辺境のこの地では父母や妻子を幸せにすることができない。ゆえに私は一刻とて故郷を思わないことはない」と。これらの話は遊子を夢から目覚めさせ、貞節な婦女の心を慰めるのに十分である。

世間の目を覚ます話

邵伯樵氏はこう述べている。「忠孝節義の四文字は、全ての世代に普及し、三綱五常¹⁷⁾は天と地の間に一流の人物を成す。ちょうど廟を支える四本の支柱のように、外面は質素で飾り気なく見えるのだが芯はまっすぐで揺ぎ無く、そして天と地の間で柱と建物を支えることができる。忠孝節義の人はこの世に無くてはならない三綱五常を促進し、社会の風紀を変えることができる。異端邪教の流派でさえも、正統な学説に変えることができる。ゆえに優れた品格を持つ人は、邪道を正道に、貧しさを豊かさに変えることができるだけでなく、下賤なる者を高貴なる者に変え、死者さえも生き返らせることができるのである。これらは私たちに節操を守ること、孝行の心が天地や歳月を貫くこと、そして天は孝行の心ある人を挫かせないことを教えてはいまいか。」

張少峯氏は新會の陳伯廉という才智ある人物がかつて学んだことを語ってくれた。彼の妻は李氏といい、貢生¹⁸⁾の李炳文の娘であった。李氏は文章をたしなみ、詩歌を詠むことができた。彼女はとても聡明で、父母に尽くし、自分よりも年若い者たちを可愛がった。伯廉の家は彼の父親が亡くなってからは困窮するようになった。ところが伯廉は年老いた母親のことが気がかりであったため外に出て働こうとせず、ただじっと座って自分の家が没落していくのを見ているばかりであった。よって母に親孝行することもできず、妻を養うこともできず、無駄に金銭を費やす人生を送っていた。ある日、伯廉の良い友人が金山¹⁹⁾へ行きたいと言ってきた。その友人は伯廉の人柄がとても良いことを知っていて、自分が旅費を支払うから一緒に金山へ行ってほしいと伯廉に頼んだ。伯廉はたいそう喜んで家に戻ると母親にそのことを伝えた。すると母親は言った。「お前が家から遥か遠くに行ってしまったら、私はお前が苦勞や貧しさに耐えられないのではないかと心配だわ。」伯廉は言った。「私は以前、お母さんが話すのを聞いていましたよ。苦難を受けたことのない者がどうして幽玄な香りを漂わせる梅花を得られようか、と。私は自分がまだ年若く、体力があるのを利用して何とか一日も早く出発したいのです。お母さんがもう飢えと寒さの苦しみを受けなくても済むように、そのためなら私は苦勞を恐れはしません。」母親は伯廉をじっと見つめながら言った。「お前が自分の目標を成し遂げると分かっているのならどこへでもお行きなさい。でも早く帰ってきておくれ、私のことを想って気苦勞しないためにも。」

この時、夫と姑の傍らにいた李氏はこう言った。「あなた、この家にはお年を召したお義母様がいるのですよ、それはちょうど夕陽が見る見るうちに西の山に沈むんでいくようなも

の。あなたにはお義母様に百年ほどにも長い間育ててもらった恩があり、お義母様に孝行を尽くさなければならぬのに、どうして家を出てそんなに遠くへ行くことができましょうか。」伯廉は言った。「我が家は困窮していて、暮らしを立てなければ母に飲み物や食べ物を差し上げることもできない。現在、母は年老いてはいるが、体はまだ健康だ。お前は私に替わって家で母の世話をし、孝行を尽くしてくれ。私が外で金を稼いで戻ってくれば私たちの衣食を支えるには十分だ。三年か五年か経ってまとまった金ができたら、すぐに家に帰って来よう。そうすれば私たちは一生安泰であろう。私はもう決めたんだ、賢妻は多くを語らないものだぞ。」

その晩、寝室に入って李氏は再び夫に言った。「あなたがどうしても金山へ行くと言うのなら、私は敢えて強く止めはしません。でも、故郷を忘れないで。決して色恋やお酒に溺れないで。私やお義母様を心に留めておいてくださいね。」伯廉が李氏の言うことを約束すると、彼女はこう続けた。「金山は万里ほども遠く離れたところ、途中風が強くなり波が荒れることもありましょう。外に出たら家にいる時とは違うのですから、くれぐれも体を大切に、寒いときは衣服を重ねて、お腹が空いたら食事をとってくださいね。私、あなたの側にいてお世話してあげることができないんですから。」そう言い終えると彼女は低い声をもらしてさめざめと泣いた。伯廉もまた泣きながらこう言った。「夫婦になってたった三か月で遥か遠く隔てて離れ離れになるなんて、私の望むところではない。だが我が家は貧しく、糊口を凌ぐのもままならない。人の子²⁰としてすべきは旅に出ること、そうする他に道はないのだ。」

夫婦二人は語り続け、ついには一番鶏が鳴き、夜が明けた。李氏は夫の衣装箱の中から衣服を見つけ、破れたところを繕って直した。伯廉は翌日の朝、母親と妻に別れの挨拶をして出発した。まさに船中は三尺もの大波が渦巻き、甲板以外の場所はさながら地獄だった。もし妻や子を養うためでないとしたら、誰が自ら進んで船に乗り込もうか。

伯廉は友人と一緒に金山に到着した。友人が病気を患っているとは思ってもよらず、支え協力してやることができなかった。とうとう伯廉はやむなく別の一行について山に入り、金を採掘することを余儀なくされた。ところが彼は幼少のころから一度も辛い肉体労働をしたことがなく、一日でも体力を使うとたいそう苦しいと感じた。しかもここではあらゆる物の値段が非常に高く、また彼はきつい労働をこなす体力も気力も十分ではなかったため、毎日の給金はただ食べるためだけに消え、一分たりとも手元に残らなかった。いつも故郷を思い出しては目には雨が降るように涙が流れた。母親は年老いてすでに七十歳になろうという頃、妻はまさに青春の年頃、伯廉と結婚してまだ三か月しかたっていなかった。しかし実際のところ今は会うことが難しく、たとえ天に向かって嘆こうが地に頭をぶつけて苦悩に泣き崩れようがどうすることもできない。

名声のために遥か遠くまで来てしまい、利益を得るために遠く故郷を離れ、それら名声や

利益の中にかほどの得失があるか見通すことができずに、どうやって親に育ててもらった労苦の恩返しができるであろうか。その上、父母の側にいて助けてあげることもできず、父母の側にいて面倒を見てあげることもできず、父母が病を患っている時に世話をしてあげることもできず、父母が亡くなった時に側にいてあげることもできないのだ。ああ、子どもが遠くに離れていると、親の心は悲嘆でいっぱいなのだ。だから親孝行をするのに遅れてはならない。豆や水のように何の変哲もない毎日の食べ物や飲み物であっても父母を喜ばせ、父母の気持ちをいくらかでも癒すことができる。人の子としてここで内省するべきである。

李氏は夫が家を出てから、さらにまめやかに姑に尽くした。いつも先に姑に食事を勧め、自分はそのあとに食べた。このようにしてひと月、またひと月、一年、また一年と月日は過ぎていったが、夫からの帰郷を知らせる便りは未だなかった。李氏は一人密かに悲しみに暮れたが、姑の面前ではいつも明るい表情を見せ、以前と変わらない様子でいた。彼女は時々ひとくひもじくなると桑の実を取ってきて食べ、それから姑には細かく切った肉を食べさせた。李氏は全力で姑に孝行を尽くしたと言ってよい。彼女はかつて姑が家の門に寄りかかって密かに涙を流し、息子の帰りを待ちわびているのを目にしたことがあり、それで姑はよく眠れず食が進まないのだと理解した。そこで姑にこう話した。「私の実家には金山から戻って来た兄弟がおります。私がちょっと行って何か旦那様から知らせがないか訊いてまいりましょう。」姑は言った。「そうなの、ではすぐにお行きなさい。」李氏は風呂敷包みを胸に抱いて出かけた。彼女が髪飾りや裙²¹⁾などの衣類を持って質屋に向かったとは一体誰が知ろうか。李氏は質屋で五両を得ると嘘の手紙を一通書いた。夫が金山から戻ってくると見せかけて、姑を安心させようと思ったのだ。ああ、この姑孝行な婦人は知恵を絞り切ったのである。

翌日、李氏は実家から戻って来たように見せかけ、手紙と銀両²²⁾を姑に手渡してこう言った。「旦那様は銀両と手紙を送ってきておりましたよ。大きな事業をしていて、今は生活に心配事はないとのことですよ。」姑は嬉しさを隠しきれず、口元には笑みがこぼれ、憂慮で縮んでいた眉間は緩み、そしてすぐにこの義娘に手紙を読んでおくれと頼んだ。手紙の内容は大体以下のとおりであった。

「うだつの上からぬ息子が故郷を離れて早いもので十年が経ちました。これまで母上に銀両をお送りすることもなく、親不孝の罪は誠に免れがたいものです。現在私は息災ですので、心配はご無用です。同封の白銀五両、どうぞお収め下さい。私は現在とても順調に、そして快適に暮らしており、理屈の上ではもっと家に送金できるのですが、手紙を出しに行く道のりがとても遠いので、始終安心できません。お金は蓄えておき、将来必ずや船の切符を買って帰り、微力ながら息子の責務を全うするつもりです。我が家の嫁は見識が浅く年も若いので、もし嫁が心を込めて母上のお世話をしていないような時は、どうぞ随時ご指導ください。季節はめぐり、冬が来たかと思えばまた夏がやって来ます。どうかお体を大切に。手紙では

節孝還魂

私の心中の思い全てを書き表すことができません。また良い知らせを母上にお便りできますことを願いつつ。」

李氏が手紙を読み終えると、姑は天地に感謝し、ほほほ、と大きな笑い声を立ててこう言った。「どうりで一昨日神様に拝んだときに、菩薩様が私に、いつになったら息子は帰って来るのかと案じなくてもよい、まだ帰らずとも元気であるとの知らせがある、と言われたのよ。本当に祈りが通じたのね。明日の朝起きたら、私と一緒に菩薩様のところへお礼の参拝に行っておくれ。」李氏は笑いながら約束した。この年老いた義母のもとに一通の嘘の手紙が届いたことで、これほどまでに喜びがあふれるとは。李氏は、義母が日頃多くの不安を抱えていると痛感したに違いない。『詩経』にはこう書かれている—「哀哀父母，生我劬勞。」²³⁾と。両親は門にもたれかかり、子どもが帰って来るのを待ちわび、息子や娘は父母を思う。また高い山の頂から遠方を眺め、この様に父母への孝徳の心が芽生える。ふらりと外に出て行って何年も働けども父母に仕えない人は、この言葉を鏡として我が身を映してみるべきである。

その日の朝早く、李氏は本当に姑に付き添い、線香と蠟燭を持って菩薩様に拝みに出かけた。道中一人の老人にばったり会い、老人は姑に話しかけてきた。この老人は姑の息子から手紙が来たことを知り、姑のために喜んだ。もともと以前から息子はすでに死んでしまったとの噂が近所で広まっていた。伯廉が今もこの世に生きてると聞いて、近隣の人々はこのことを知ると誰もが姑を慰めにやって来た。

李氏は毎朝いつも肉を買い、柔らかくなるまで煮て姑に食べさせ、この肉は柔らかいですよ、あの肉は柔らかいですよ、などと言いながら姑に勧めた。姑は声をあげて楽しそうに笑い、食が進んだ。この姑と嫁を見かける人は誰もが、二人がとても楽しそうに過ごしていると思った。李氏が髪飾りや裙を入れた質屋の老婦人が親切心から姑にこう言ったとは誰が知ろうか。「お宅の息子さんが銀両を送ってくれたと聞きましたよ。可哀そうに、お嫁さんが衣服を全部持ってうちにやって来て家計の足しにと質に入れたのですよ。今は銀両があるのだから、お嫁さんの服や裙を取り戻せますわね。」これは異なこと、と姑は思い、義娘に問い正した。「どうしてお前は質屋に服を持って行ったことを私に黙っていたの。」義娘は答えた。「いいえ、服を実家に持って行って洗濯しただけですわ。」姑は言った。「ならば今日は北風が吹いてきたのに、どうして服を取りに行かないの。」李氏は言葉に詰まり、真実を告げる他なかった。姑は言った。「もし本当でないとして、お前が作り話を語って私を喜ばせ、拳句の果てにがっかりさせる必要はあるまい。」姑は話すのをやめた。嘆き、悲痛な叫び声をあげ、さらに病を再発させた。李氏は何度も心を尽くして姑に説明した。

さらに数年が過ぎた。姑は病気がちだった。一体、李氏はどうやって姑の治療費を得たものだろうか。李氏には頭を下げては人に助けを求め、頭を上げては天に助けを求め、朝に夕に香を炊いて姑の長寿を祈るより他なかった。ある婦人が度々李氏に再婚を勧めた。李氏は

断り、こう言った。「忠節を尽くす士官は二人の主には仕えず、貞節を尽くす婦人は二夫にまみえぬもの。それにもし私が今日再婚したらお義母様は誰に頼ればよいのでしょうか。私にこの様な不愉快な話はもう結構です。」その婦人はすっかり恥ずかしくなってしまった。以後、もう誰も李氏に再婚を勧めることはなかった。姑の病は日増しに悪くなり、李氏が快復するように尽力しても一向に良くなる兆しはなかった。姑の病はすでに手の施しようがないとは誰知る由もなく、そして姑は息を引き取った。李氏は幾度も痛ましいほどに涙を流し、姑の葬儀を出すための銀両が無いことに苦しんだ。隣近所の住人は誰もが義母に孝行する李氏の姿に感動し、義母の葬式を出すための資金を援助した。

李氏は自分一人で姑の喪に服して半年が過ぎ、実家には彼女に再婚を勧める人が訪ねてきた。また彼女の伯母も再婚を勧め、仲介者までもが話を持ってやってきた。しかし李氏は依然として揺るがず、たった一人でこの冷え冷えとした家に住むつもりでいた。この先一体どうなるのであろうか。彼女は指を折って数えた。夫が家を出てから既に十九年が経ち、今も帰って来ない。早く死んで自分の名誉と節操を守る方が良い、そうしましょう。そして彼女は泣きながらこう言った。「旦那様！この十九年間、あなたからの便りは一通もなく、あなたの痕跡もすっかり消えてしまいました。今やお義母様はこの世にはなく、もう私と一緒にいる人は誰もいません。私に情詩²⁴⁾を一つ書かせてください。私が死んだ後に残り、もしも万が一あなたが帰って来てこの詩を目にするとしたら、それはあなたが私を見ているのと同じこと。」彼女は指先を噛み切り、白い布に血書を書き、首を吊って死ぬことにした。その詩の内容は次のとおりであった。

「十九年来あなたに会うことが叶わず、私はひたすら懸命に糸つむぎをしながらお義母様を支えてまいりました。あなたが金山へ行ってからお便りがなく、たとえ地の果てまでも探しに出かけたとしてもあなたを見つけることはできないのでしょうか。ただ私に分かっていることは、貞節を守り通し、貧しい生活の苦しみを通り抜けた後で私に残されたこの空っぽの部屋の中で一人眠りにつくこと。人生とは、あの一對一緒に花から花へと飛び回って蜜をとり、楽しく戯れることの出来るつがいの胡蝶の生命とは比べようもありません。近所の方は私に再婚を勧めましたが、それはお義母様を捨てて出ていくのと同じこと。私は古来の貞節な婦人を見習うことにしました。旦那様、なぜあなたは秋胡²⁵⁾に倣わないのでしょうか。可哀そうに、頭は白髪で真っ白のお義母様は、毎晩月明りの下で悲痛な思いで泣いていらした。お義母様がすでに亡くなられた今、私がお義母様に孝行するには、黄泉の道をお供するより他にありません。あなたのお母様が亡くなられたとき私がこの手で埋葬しました。でも私が死んだら一体誰が埋葬してくれるのかしら。いつの日かあなたが千里の彼方から帰って来ますように。可哀そうなあなた、戻ってきたときには私はもう死んでしまっているのだもの。この血書に私のあなたへの溢れんばかりの恋慕の思いをしたため、私の思いに至らなかったあなたとお別れします。家を出て行った人が戻って来ると鳥の鳴き声が聴こえる、それ

はカッコウの寂しい鳴き声、真珠のような涙がこぼれ落ちる。」

李氏が詩を詠み終えると、その両の眼から涙が流れた。すぐに姑の位牌の前に跪き激しく泣きながらこう言った。「ああ、安人²⁶⁾！この親不孝な義娘は、この家のために蠟燭を灯し、香を炊き、後継ぎとなる子孫を産み、ご先祖様に名誉をもたらして差し上げるべきでしたのに。でも私は一人ぼっちで寂しく苦しみに耐えるより他にないのです。ですから、どうか九泉の下のあの世でこれからもお義母様のお世話をさせてください。」続けてこう言った。「旦那様、これより先、私は再びあなたに会うことは叶いません。今世の夫婦は来世を待って再び巡り会いましょう。私は死んでもきっとあなたをお守りするでしょう。どうか私のことを冷たい女だと責めないでくださいね。」そう言い終え、一本の縄を探してくると李氏は首を吊って死んだ。

次の日、近所の住人たちはこのことを知って激しい衝撃を受けた。誰も彼も李氏を救う手立てがないことに嘆き悲しみ、この孝行婦人の理不尽な死を憐れに思い、金銭を出し合って葬儀を出すことにした。李氏が埋葬されてから、いつも彼女の墓ではカッコウが鳴いていて、その寂しそうな鳴き声を耳にする人は誰もが心を痛め、涙を流した。

このようなことが起きたとは露知らず、伯廉は金山で十九年もの間苦難を味わうもままならない毎日を送っていた。ある日のこと、伯廉は一塊りの金を掘り当て、さらに百両あまりの金銭を得た。彼はたいそう驚き、喜んだ。その手に得た金銭は伯廉自身の予想を超えていたのだ。そこで彼は家に帰る方法を探した。伯廉が故郷にたどり着くと、隣近所の人々は誰もが彼を見てとても驚いた。その理由を知らぬは伯廉ばかりであった。それから自宅の門を見ると鎖がかかっており、以前とは様子が違っている。そこで伯廉はどうしたのかと隣人に尋ねた。彼は母親と妻がすでにこの世を去ったと知ると、腹が破けるのではないかと思うほどにわなわたと震えた。急いで家の中に入り、母親の位牌に跪くと堰を切ったようにわあっと泣き出した。伯廉が帰って来たという話は隣近所の住人の間に伝わり、婦人たちが様子を見に大勢やって来ると、伯廉はまさに悲痛に苦しみ心を痛めていた。婦人たちは彼に近づき力を落とさぬようにと励ましたが、伯廉は新しく備え付けられた李氏の位牌を見て一層心を痛めた。そして泣きながら母親にこう言った。「お母さん！以前お別れしたとき、私にたくさんの気遣いや注意の言葉を下さいましたね。全ては私が帰ってきてお母さんに親孝行をする日を望まれてのことだったのに。今日このお位牌を見ようとは夢にも思いませんでした。親不孝な息子はまさに傷心悲痛の思いです！」また妻に向かって泣きながらこう言った。「賢妻よ！昔から美人薄命と言うが、お前は どう見ても美人ではないのになぜこんなに薄命なのだ。今日お前と死に別れる悲しみがあることをもっと早くに知っていたなら、たとえ千個の金を積まれたとしても決して金山には行かなかったものを。」そして伯廉はその場に泣き崩れた。傍らにいた人々はまたその姿を見るや彼のために心を痛め、涙を流した。

この日の晩、伯廉は部屋の中を探し回り、箱を見つけた。その中には白い布が入っていて、

そこには血書が書かれていた。一息に読み通すと妻の苦しみが伝わってきた。そして再びむせび泣いた。翌日、伯廉は祭祀に必要なものを揃えると、まず母親に、次に妻に祈りを捧げた。彼は墓前に酒を三杯捧げ、一篇の詩を朗読した。

「母のもとを離れて金山へ渡り、銭が無く帰れずじまい。母に孝を尽くし難く、目にはあふれんばかりの涙。別れ際に母は私に達者でと言ったものを、戻れば今まで帰らずにいたのが悔やまれる。父母が苦勞して育ててくれた恩は深く重く、我が身を後悔の淵に留める。両親がこの世にいるうちは鶏や豚をあげられず、死んでから牛を屠り供えても空しいというもの。あの日のあなたの注意の言葉は胸に残り、耳に聴こえるようなのに、今日戻るとあなたはもはやいない。我が本意は一心に孝を尽くすこと、最後に墳墓で会うとは思いません。」

伯廉は母親を拝んだ後、妻を拝み、三杯の酒を捧げながらこう言った。「賢妻よ、老いるまで私についていきたいと言っていたのに、今はただ墓が見えるのみでお前の姿はない。私は空しくもお前に十数年の間苦勞をかけ、このように苦しめて死なせてしまった。こんなことになってしまい、お前が私のことを薄情だと恨むことのないよう祈るばかりだ。ああ…」伯廉は一首詩を捻り出した。

「我ら手を握りながら共に泣き、夫婦の間で別れの言葉を交わした。離れるとは知らず、いつ帰るかも知らない。母はまだこの世にあって、貴女は私に替わり孝を尽くした。家が貧しいのを意に介さず、私のために飢えに耐えた。母がこの世を去ると、貴女はまた私のために涙で衣の襟を濡らした。ああ、ああ、我らの魂はなぜ永遠に九泉に隔てられ、いつ会えるとも知れず。青山の頂に埋葬された貴女の亡骸、孤独な墳墓は付き添う者も無し。ああ、ああ、群れから離れた雁が一羽きりで飛んでいくかのよう。貴女が死んで私はもはや貴女に会えなくなってしまった、貴女は知っていますか、私が泣いているのを。あの世の貴女に私を想う気持ちがあるのなら、地獄の門で『あなた』と呼んでくれ。」

伯廉は李氏を拝むと地面に倒れ、通りすがりの人に起こされ助けられた。その時すでに日は西山に落ちようとしており、皆が彼を起こして体を支えながら家へ送って行った。それから彼は悶々鬱々としながら空っぽの部屋に座り、ランプの火を見つめながら涙をぬぐった。その様子はさながら肝を抜かれたかのようであった。伯廉が疲れきって視線が朦朧としたその刹那、突然妻が返って来たのを目にした。伯廉は歓喜極まってこう言った。「私はお前がもう死んでしまったとばかり思っていたが、本当はこの世にいるのだね。」妻は言った。「いいえ、私はあなたに一目会いにやって来たのです。ありがたくもあなたは結婚で結ばれた夫婦の愛情を示し、山の上のお墓で哀悼の儀式をあげ、私の悲痛な思いを引き出して下さいました。今日あなたは私が貞節を固く守り、孝を尽くしたことを祈念して下さいましたので、天の神様は私に数日後に甦り、再びあなたと夫婦の縁を続けることをお許しになったのです。」伯廉は言った。「お前と私はこの世とあの世に隔てられているのに、どうやってもう一度夫婦になれると言うのだ。」李氏は答えた。「明日の朝、村境の門のところに行って見張っ

節孝還魂

ていて下さい。やがて棺を担いで山へ向かう一行が現れます。棺の中の遺体は同じ郷の紳士の下女、李潤香のものです。私はその遺体を借りて甦り、あなたは娘を妾として娶ってください。潤香の容姿は私と瓜二つ。どうか、このことをしっかりと覚えておいて、決して忘れないでください。」そう言い終えると、李氏は急いで去っていった。伯廉は彼女を引き止めようとしたが、その姿は跡形もなく消えてしまった。

伯廉は驚いて目を覚ますと、テーブルの上のランプはまだ明るく、あれがただの夢であったことを知った。しかしふと思ひ直し、あのような夢を見るのは何かの因果に違いないと考え、そして試しに明朝その場所に足を運んでみた。すると確かにそこに棺を担いだ一行が現れた。司祭が竹竿を手にもって一行の先頭を進み、その後ろを数人が悲しそうに泣きながらついて行く。まさに夢の中の話と同じだ。あの話は必ずや本当に違いない。伯廉はそう思うと、前に進み出て両手で一行が歩くのを止め、棺が先に進むのを阻んだ。彼が棺の中の遺体はまだ死んでいないと言うと皆大騒ぎになり、伯廉が妻の喪に服すうちに気が狂ったのだと口々に言った。伯廉は言った。「もしあなた方がこの話を信じないなら、棺を開けてみれば分かること。」皆は言った。「もし棺を開けてみて中にあるのが死体だったら、お前には棺の中に入れてもらうぞ。」伯廉はあえて自身の背中を押すようにこれを承諾した。心の中ではまだ完全に確信が持てなかったからである。棺を開けてみると、その中の遺体は依然として動かない。伯廉は思わず走って逃げ出そうとする。人々は大騒ぎでこれを阻もうとした。するとその刹那、その遺体がまさに動いたのである。一転して人々の胸に歓喜がこみ上げ、そして泣き出した。潤香が生き返るとは誰が思ったであろうか。ところが潤香は仕えていた主人のことを忘れ、実の父母のことも分からなくなっていた。ただ、自分には夫がいることだけを知っていた。彼女は伯廉を見て泣き出したので、人々は皆驚いた。そこで伯廉は事の理由を説明し、人々は遺体を借りて魂が甦ったのは伯廉の誠実さと孝徳の思いに感じ入った天帝の御業であることを知った。それから人々は早速二人を家まで送り、隣人たちは皆歓喜で胸がいっぱいになった。潤香の声は伯廉の妻の声とそっくりで、彼女の品性とふるまいは妻のそれと同じであった。そして夫妻は仲睦まじく、互いを慈しんだ。

伯廉は妻にたずねた。「お前はすでに死んでしまったのに、どうして甦ったのか。」李氏はこう答えた。「潤香のこの世での寿命は終わりました。冥土の王様は私が貞節を忠実に守り、孝を尽くしたのをご覧になって、特別に潤香の亡骸に魂を甦らせたのです。私たち夫婦のこの世での運命はまだ終わっておらず、この先限りない幸運に恵まれることでしょう。今日あなたが私を迎えてくれたので、私はあなたの妻になれたのです。あの時あの場にいた人々は称賛の声をあげていましたね。貞節を守り、孝を尽くせば天地を感動させ、報いが得られると誰もが実感したからですわ。」

その後、伯廉は自宅の付近で商売を興した。数年間かけて財を築き、たくさんの富を得た。李氏は三人の男子を次々と産み、その上さらに十人の孫を得た。夫妻は晩年を二人で幸せに

暮らし、何の病を患うことなく八十歳まで生き、そしてこの世を去った。

『廣訓』²⁷⁾はこう説いている。「孝道とは、天道の運行の如く永遠に変わることがなく、大地から生まれる万物が各々の役割を成すが如く、人類の最も根本的で重要な品行のことである。三才²⁸⁾は孝道を以って根基を成し、あらゆる行為は孝道を彰かにし、これを遂行するためのものである。ゆえに人は孝道を尽くせば天地を揺るがし、鬼神をもひれ伏させ、そしてまた先祖に名誉をもたらし、子孫は一層栄えるのである。」伯廉の孝を尽くす様子を見てみるがよい。悲惨な運命に遭遇し、はるばる金山に渡ったが自己の心願を達成することができず、はからずもこの絶望的な状況から救われるに至ったにもかかわらず、さらに嘆くより他ない事態に見舞われた。李氏は誠実で孝養を尽くし、あらゆる困難や苦しみに遭ったが、最終的には良い結果となり、生き返って夫と再会することができたゆえに、たくさんの子孫に恵まれた。彼女は誰に対しても分け隔てなく、ただ善人でありさえすれば天のご加護があることを十分に示した。

世の男子よ、伯廉を真似て富と名声を追い求め、遠くへ旅立つことなかれ。さもないと一生震えを抱えることになる。世の女子なる人よ、李氏の忠誠と孝道の心を学びたまえ。将来必ずや傑出した立派な子供を産むことができよう。もし富と名声の二つのために父母から遠く離れてしまえば、昼は門に寄りかかってあなたの帰りを待ち侘び、夜は綿の衣を抱きしめてあなたを想い、寝ては寝返りを繰り返し、手紙を読むときはあなたを思いむせび泣き、夜明け前には雀の鳴き声を聴き、またあなたの帰郷を待ち侘び、晩には蠟燭の火が消えるのを目にし、そして君に早く帰ってきてほしいと思い、楽しい日々を過ごしても悲しい思いが募り、門を叩く音が聴こえれば急ぎ出て行って辺りを見回し、何を食べても味気なく、暮らしに安らぎや楽しみがない、そんな思いを父母に強いることになるのである。父母はいつまでも元気であるわけがなく、私たちは人の寿命の長さを知る術を知らない。私は世の遊子が直ちに帰郷されることを願う。貧しくて思うように孝道を尽くすことができなくても、何も父母に豪勢な料理を出す必要はない。父母の膝元で孝行するのである。さもなければ後々後悔するであろう。私の願いは遊子が長男を育て上げ、年老いたときに息子としての責任を全うし、父母の養育の苦勞に報い、一緒に家族団欒の楽しさを享受することである。

古代の聖人たちは非常に多くの言葉を残しているが、中でも最も重要なのは自分の心の中にある善悪を省察することの必要性である。まず門を閉めて己を静かに見つめる。万事公明正大であれ、そうすれば謙虚で気立ての良い友達に恵まれ、家は子孫でいっぱいになり、たくさん良いことが起きる。その時あなたはこの言葉が正しかったことを知るであろう。

人の子²⁹⁾として理解していなければならない事

あなたが幼かった頃、両親はあなたがまだ腹を空かせないうちに茶と飯を与え、腹の空き具合を確かめようとし、あなたがまだ寒くならないうちに衣服を着せ、あなたが風にあたって

節孝還魂

病に倒れてしまわないかと心配した。あなたの食が進まなければ心配し、あなたの衣服がほころびていれば繕ってくれた。あなたが小便を垂れた床³⁰で自ら寝ようと言い、あなたを乾いているところに寝かせてやり、枕や床の上に敷いた布団に糞尿が付いていても気にしなかった。あなたが誰かと契³¹を結ぶとき、たとえ遠く隣村に住む兄嫁を訪ねても契の約束を取り計らってくれた。あなたが幼児でなくなるまでに少なくとも三年を要し、あなたが初めて歩くのを学ぶのを見て、あなたが一步また一步と歩くのを導いてくれた。時折あなたが躓けば両手であなただを抱きながらあやし、あなたを腹の底から笑わせてくれた。病を患うのではないかと恐れ、もしあなたの体に蚤が飛んでいようものなら、あなたのために香を焚き、石にさえ拜んだ。あなたの心を慈しみ、あなたをまるで宝石のように大切にした。あなたが少し成長して私塾に入門する頃には、熱心に先生と関わり、また先生が厳しく教えないのであなたが怠け者になり、よく学べないのではないかと懸念した。またあなたが年若いので、料理する時には塩や酢を余分に加えてはならないと注意してくれた。勉学が終わって家に戻ると、いつも朝ごはんを食べるようにと言った。飯がまだ炊けていないと台所で肉や野菜を炒めるようにと言うので、これは何と面倒くさいとあなたは思ったことであろう。あなたの為に喜びも苦しみも味わい、あなたが成長したら先祖に名誉をもたらすことのできる大人になるよう願った。

また、あなたのために良い仲人を見つけ、嫁を探してくれる。六禮³²は順序に従って勧められなければならない—ピンロウ、ゴマ、ナツメヤシ。それに新婦を迎える結婚の宴に来てもらうように親しい友達に招待状を送らなければならない。結婚した嫁が貞淑で気立ての良い「賢淑」ならば、婦人が尽くすべき婦道を全うすることができよう。もし嫁が「賢淑」でないならば、舅姑の生活は安泰ではない。ある意味愚かな夫は、妻が怒り出しはしないかとびくびくし、完全に妻の言いなりになるのだ。このような妻は、義理の叔母³³とも仲良く暮らそうとせず、兄弟の仲を裂こうとけしかけ、その上夫には楽しそうに他人の悪口を言う。この手の妻は、自分は上等の布の衣服を着ても両親には麻布の服を着せ、自分は米油で艶々した粘りの強い米を食べても両親には粗末な米を食べさせ、自分はたくさんのお金を使っても家計簿に書き留めず、両親にはほんの少しのお金しか使うことを許さなくとも必ず家計簿に書き留めるのだ。

このようなことはすでに耐えがたいことであるが、もしあなたが妓楼や賭場通いを覚え、毎日新しい衣服を買い、毎日質屋に田畑や建物を入れ、財産をすっかり売り飛ばし、節約もせずに金銭を使うのだとしたら、もはや言うまでもない。故郷を離れてどこかへ流れていき、兄弟も怠け者に成り果て、妻や子供とは疎遠になり果てる始末。それでもなお英雄気取りで高慢にも他人を見下し、自分はどこへでも縦横無尽に行けるのだと思ひ込み、両親の教訓に従わない。その時、誰かがあなたを非難しても、聞き入れるどころか自分が不当な扱いを受けたと感じて怒りを少しも抑えようとせず、父母を巻き込み、息子をやくざな人間に仕上げ

てしまう。

息子が土地を耕すことの大変さを知らず、また如何にして生きていくかを知らなければ、父母がたくさんの憂鬱や不安に苛まれてもどうやってそれを他人に話せるであろうか。あなたが金持ちにならず、着るものや食べるものが足りていないのではないかと心配し、あなたが金持ちになった時には両親はすでに高齢になっているのだ。父母がこの世から去ったらささやかな料理を供えること、牛を捕まえて墓前に捧げなくともよい。年月の過ぎるのはとても速いというのに、いつになったら父母の深い恩に報いることができるのであろうか。もし天のように大きな父母の恩情に報いたいと願うのならば、突如として目を覚まし、悔い改めなければならない。さもないと自分で災難を回避することなど到底できないであろう。私はこれを以って座右の銘とし、人々に警鐘を鳴らし、覚醒するように勧めたい。人々の間に広く伝わるこの話は、もともと正統な文章ではなく、平凡な話し言葉で書かれ、原稿は未完のままである。

注

- 1) 「節孝還魂」、『続刻博聞録』二卷、合璧齋、広州、1892年；『庸言涉趣』二卷、翼化堂、広州、1896年。
- 2) 中国文学専門家の邵穎容氏、および彭淑嫻氏が作品を原文から散文調の現代広東語に翻訳、その後筆者が現代日本語に翻訳した。この場を借りて、両氏のご協力に心から感謝申しあげる。
- 3) マーロン・ホンによれば、渡米移民の妻を題材とする木魚書の作品2、3本がアメリカの中国人コミュニティで広く読まれていた。Hom, Marlon K., *Songs of Gold Mountain: Cantonese Rhymes from San Francisco Chinatown* (Berkeley: University of California Press, 1987), 47-51.
- 4) 木魚書については、梁培熾『香港大學所藏木魚書収録』、香港、1976年；渡辺浩司、金文京、稲葉明子（編）『木魚書目録』、好文出版、東京、1995年；*Muk-yu Shu and the Cantonese Popular Singing Art*, *The Gest Library Journal*, vol. II, no. 1 (Fall 1987): 16-30 を参照。
- 5) 四邑地域からの移民の渡米とアメリカにおける経験、および家族関係については、June Mei, "Socioeconomic Origins of Emigration: Guangdong to California, 1850 to 1882," in Lucie Cheng and Edna Bonacich, eds., *Labor Immigration under Capitalism: Asian Workers in the United States before World War II* (Berkeley: University of California Press, 1984); Madeline Y. Hsu, *Dreaming of Gold, Dreaming of Home: Transnationalism and Migration between the United States and South China, 1882-1943* (Stanford: Stanford University Press, 2000); 貴堂嘉之、『アメリカ合衆国と中国人移民 歴史の中の「移民国家」アメリカ』を参照。
- 6) 旧来の女性のジェンダー規範と女権論については、末次玲子、『二十世紀中国女性史』、青木書店、2009年；須藤瑞代、『中国「女権」概念の変容 清末民初の人権とジェンダー』を参照。
- 7) 銀貨の通貨単位で、十六両は一斤。
- 8) 孔子の弟子。
- 9) 『詩経』の中の「魏風・擗帖」。役人の父母や兄への思念の情が表されている。
- 10) 『詩経』の中の「唐風・鴛羽」。徴兵のため長い間故郷を離れている農民が、父母を養うために

節孝還魂

耕作ができず、やるせない気持ちを天に向かって叫ぶ様子が表されている。

- 11) 家を遠く離れ、他郷にいる人のこと。
- 12) 北宋皇帝趙頊の第一の年号、1068年から1077年までの10年間を指す。
- 13) 古代の首府に設立された最高学府のこと。人材を育成し、儒家經典を伝授した。
- 14) 陳繼儒『読書鏡』（明代）より。
- 15) 元代の役人、詩人。
- 16) 中国の賭博の一種。
- 17) 三つの基本的な道徳と五つの守るべき正しい行いのこと。「三綱」は、君臣・父子・夫婦間の三つの道徳、「五常」は、仁・義・礼・智・信の五つの道義を指す。
- 18) 明清両代における生員（秀才）の優秀な者で、國子監（国家經營の最高学府）で学ぶことを許可された者のこと。
- 19) アメリカ合衆国の通称。
- 20) 男子。
- 21) 女性がズボンを穿いた上に穿くスカート。
- 22) 貨幣として使用できる銀。
- 23) 『詩經』の中の「小雅・蓼莪」より。「可哀そうな私の父と母、私を育て上げるのに本当にご苦労されましたね。」の意味。
- 24) 愛を詠んだ詩。
- 25) 『列女伝』に登場する春秋時代の人。「春秋魯人、婚後五日、游宦於陳、五年乃歸、見路旁美婦采桑、贈金以戲之、婦不納。及還家、母呼其婦出、即采桑者。婦斥其悦路旁婦人、忘母不孝、好色淫佚、憤而投河死。」このことから、秋胡とは愛に一途でない男性の代名詞とされる。
- 26) 古：お義母様。
- 27) 『聖諭廣訓』。雍正二年（1724年）出版の役人が学ぶための典籍。
- 28) 天、地、人。
- 29) 息子。
- 30) ベッド。
- 31) 二人かそれ以上の血縁者以外の人と親族と同様の関係を結ぶこと。
- 32) 求婚から婚姻が完了するまでの過程、すなわち六個禮法のこと。
- 33) 嬖嬖。ここでは舅の弟の妻。